

戦争特集

私の戦争は10月に終わった
～空襲から疎開までの体験記～

太平洋戦争終結から80年以上が経ち、戦争を直接体験した人々の証言を聞くことはますます難しくなっています。
昨年12月に、終戦当時15歳だった赤岡町の野村土佐夫さんにお話を伺いました。土佐夫さんの著作や日記をもとに、高知大空襲や集団疎開、戦後の生活の様子を紹介します。

（担当 広報編集委員 宮崎文敬）

脳裏へ強く焼き付いた
空襲と避難

土佐夫さんは1945年（昭和20年）の4月、高知工業学校（現・高知県立高知工業高等学校）に入学しました。予定されていた入学試験は、米軍機の攻撃により中止され、後日簡易試験を受けて合格します。学校では、敵国の言語という理由で自主規制されていた英語を学べるなど、比較的自由な授業を受けられました。7月4日の高知大空襲で学校は全焼しました。

空襲当日、土佐夫さんは高知市廿代橋通りの実家にいました。未明に火の見櫓から見えた米軍爆撃機がいつもより多いことに気づいた隣組の組長さんが「みんなあ、へんしも早う逃げんといかん。B・29の大編隊じゃ」と避難を呼びかけま

した。土佐夫さんは両親、姉2人と共に、避難先としていた2km北東の紡績工場（現・イオンモール）へ向かいます。廿代橋を渡り、高知駅前の通りに出たときには、辺り一面が焼夷弾で火の海でした。母と姉が防空壕へ逃げようとする中、「入ったら焼け死ぬぞ」と父が一喝、付近の路地に入って焼夷弾をやり過ごしました。その後、日赤通りの手前にたどり着きますが、延焼した散髪屋の板塀を消火しようとする男性と遭遇し、消火の協力を要請されます。「子連れだから堪えてくれ」と父が断ると、「非国民が……」と男性にのしられたそうです。

取材時に、「さぞ腹がたつたのでは」と質問すると、逃げるのに必死でそれどころではなかったと当時を振り返り、「非国民やあるかよ」と、苦笑しながら語っていたのがとても印象的でした。



▲空襲から3日後の高知市廿代町
※高知市立市民図書館所蔵 寺田正写真文庫

建物延焼を目的とした数種類の焼夷弾による火の手に阻まれながら、当時の高知駅構内を縦断した頃、照明弾の役割を持つエレクトロン焼夷弾が地面一列に着弾しました。久万川の木橋の下に隠れて難を逃れましたが、焼夷弾が噴水のようにオレンジ色の火花を吹き上げる光景は、後に「火の芸術」と著述するほど、土佐夫さんの脳裏へ強く焼き付いたものの、恐怖感

全くなかったそうです。

空襲後、土佐夫さんの実家は全焼し、家族は母方の叔母のアパートに身を寄せます。しかし、米軍艦隊による艦砲射撃のうわさが広まり、大栃（現・香美市物部町大栃）へ再び避難。その後、学校から集団疎開の通知が届きます。父親は疎開に反対しましたが、母親は賛成し最終的に土佐夫さんは池川町（現・吾川郡仁淀川町）への疎開を決定しました。

戦後に始まった疎開生活

8月15日、土佐夫さんは高知駅で玉音放送を聞き、終戦を知ります。父親は、疎開させる必要はないと、学校に掛け合いますが、県の指令だからと強要され、渋々同意。土佐夫さんは仲間とともに汽車で移動したのち、疎開先の池川町まで約23kmの道のりを6時間かけて歩きました。到着した頃には日が暮れていましたが、軍事教練で鍛えられていたことから、脱落者は誰もいませんでした。

疎開先の老夫婦の家に預けられ、草むしりなどに従事しましたが、重労働に疲れ果てた土佐夫さ

んは理由を見つけては頻繁にサボっていたそうです。

やっと終わった戦争

集団疎開の解散が8月末に決まり、土佐夫さんは大栃へ戻ります。家族は空襲のトラウマから大栃から約4km北にある上蕨生村の神池集落へ引っ越していました。親戚が描いた地図を頼りに一本道を数時間かけて歩き、家族と再会できた時には、泣いて抱きしめられ、その喜びを分かち合いました。

神池への移住後は、国民学校に籍を置き、8月中は知人の宿題を手伝うなど、「お町の人」気分でした。9月になると、学校から肥料用のかやを刈るよう指示が出されます。慣れない山仕事に転落したり、地元の人との付き合いで食べた山の木の実でお腹を壊したりすることもあったそうです。

その内に、高知工業学校が10月開校との通知が届きます。10月1日、家主から借りた大八車に家財道具を載せ、一家は、神池から母親の実家がある香我美町岸本へ歩いて戻りました。着いたときは真夜中で、転がり込むように眠りに

ついた土佐夫さん。戦争が、やっと終わった一日でもありました。



▲昭和30年代の神池小学校

戦争には夢がない

「まるで夢物語のようだった」と、当時を振り返っていましたが、戦争被害に遭うことは「哀れである」とも語っていました。

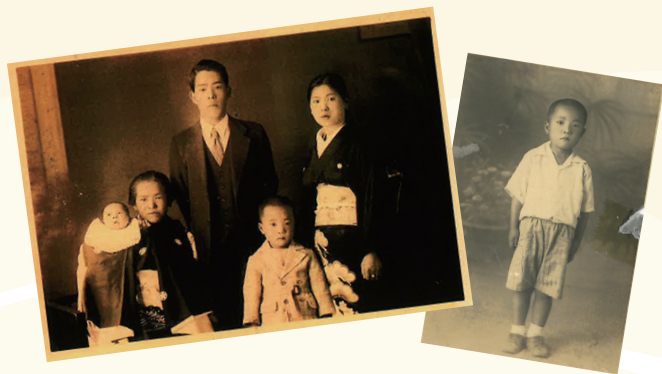
また、「戦火に巻き込まれたら、なんにもできん。食べることも寝ることもかなわず、夢がない。」

自分のことだけ考えないで我々は仲良く手を携えながら、同じ夢を共有していかなければならないと思う」と主張していました。そして、同じ境遇に立たされた

なら「命あつての物種、逃げること！」と、語気を強めていたのがとても印象的でした。

決して感傷的にならず、体験したことを抑制的に語る口調からは、土佐夫さんならではの、当時を生き延びた冷静さとたくましさ、そして強い意志を感じ取れました。私たちは、当時を生き抜いた方の貴重な証言として、心に刻む必要があると思いました。

取材にご協力いただきました野村土佐夫さんは、本年2月に逝去されました。
心よりご冥福をお祈りいたします。



▲少年時代の土佐夫さんと
海軍上等兵曹だった野村悦三郎さん

▲当時4歳の土佐夫さん